

法救造五事毘婆沙論についての検討

——大毘婆沙論研究の一環として——

河村孝照

従来、アビダルマ佛教の研究にあつては、大毘婆沙論はつねに斯學の標準論書とされてきた。しかしその教學内容にいたつては複雑多岐であつて、例えば新譯、舊譯のそれを比較するときでさえも、いずれの説にもとずいてよいのか、去就をつけかねることは一再にとどまらないが如くである。したがつて、大毘婆沙論の研究は、その周邊論書の側からも推進し、これらの相互連關の上に考慮するべきでもあると思う。

この研究の一として、いま五事毘婆沙論についての検討、つまり大毘婆沙論との本文の比較研究を試みようとした。ここで、五事毘婆沙論をとりあげたのは、主として次のような事情によつたからである。すなわち、まず五事毘婆沙論と大毘婆沙論との間にはきわめて密接な關係を豫想しうること、それは

一、五事毘婆沙論は法救によつて造られた論書であつて、これが大毘婆沙論には、「法救論」なる著述のあつたことが明

かにされており、かつまた大毘婆沙論が、「法救」なる論師名をしばしばあげていること。

二、現存アビダルマ論書の中、大毘婆沙論と同じように、「毘婆沙論」*Vibhāṣaśāstra*と稱している論書は、五事毘婆沙論以外他に見當らないこと。

三、大毘婆沙論は、しばしば品類足論を引用しているが、品類足論の辯五事品は五事論にあたり、従つてこの廣釋である五事毘婆沙論と、大毘婆沙論との間になんらかの關係を豫想せしめること。

四、五事毘婆沙論中には、大毘婆沙論の本論である「發智論」の名をあげていること、また大毘婆沙論中にきわめてなじみ深い論師である、「世友」、「協尊者」、「大德妙音」などの名を出していること。

五、木村泰賢博士は、「阿毘達磨論の研究」なかで、大毘婆沙論の成立について、「すでに幾多の小毘婆沙があつて、こ

れらがその先驅をなしたということには疑がない」という見解を示されているが、五事毘婆沙論は、木村博士のいわれる毘婆沙論の先驅の毘婆沙論としてみたられりうる體裁をそなえていること。

六、また渡邊雄博士によつて、兩論の間に密接な關係の存することが論及せられていること、などである。

そこでこれらの教示をえて、兩論の間にいかなる内容の關係を見出しうるかについて論じてみたいと思う。」

本研究にあつては、まず兩論の中より相應する文章を検出してその比較對照を試み、それによつて同異をふりわけ、異なつた點についてそれぞれその理由を精査することによつて、兩論の相互關係をなしうる限り明瞭にすることに努めた。その結果、次のような結論をうるに至つた。

一、五書毘婆沙論と大毘婆沙論とは、すでに渡邊博士が論及せられたように、きわめて密接な關係のあることが理解できた。

二、渡邊博士は、この兩論の關係の内容については、佛書解説大辭典「五事毘婆沙論」の項、ならびに國譯一切經毘曇部「品類足論」の解題において、「五事毘婆沙論は、大毘婆沙二百卷を一旦くぐつてきての論典であるから、同婆沙の義をもつて懇切零細な説明を施している」という見解を示されて、五事毘婆沙論を婆沙論以後の作品として取り扱われている。

る。これは學的論證が公けにされてないために、論斷の根據を知ることは困難であるが、現存毘婆沙論と比較する限り、この見解に無條件に隨うことには躊躇せざるをえない諸例をあげることができること。

三、その諸例を精査した場合、渡邊博士の所論のように、五事毘婆沙は婆沙の義をもつて説かれている、と考ふるよりは、むしろ、現存毘婆沙論は、五事毘婆沙論をうけて、あるいは増廣されたものであると理解する方が、納得のいく場合が多いこと、などである。

そこでこの發表には、紙面の制限があるので、兩論の間にあつて相應はするが、異なつた部分をも示している諸例をいくつかあげて、前記のような結論をうるに至つた一過程を明らかにしてみよう。』

資料はすべて大正藏經によつた。數字は藏經のページ數である。引用文中の付號は著者が付した。

A 五事毘婆沙論

一、有作是說。爲遮外道大種有立。故唯說四。彼執虛空亦是六種。問何故虛空不名大種。答虛空無有大種相故。謂大虛空是大非種。以常住法無造作故。大德妙音亦作是說。虛空大種其相各

大毘婆沙論（卷百二十七）
「有說。爲止外道所說。謂外道說大種有五。即前四及虛空、今但說四明虛空非大種、問何故虛空不立大種。尊者世友作是釋言。以虛空世大種相故。謂有增有減是大種相。無增減是虛空。

異。虛空雖大而體非種。又諸大種若能成身多。是有情業異熟攝、虛空無彼業異熟相。是故虛空定非大種。」（九九〇a）

有損有益は大種相。無損無益は、虛空相、有興有衰は大種相。無興無衰は、虛空相。是故虛空不立大種。尊者妙音作如是釋。虛空大種其相各異。謂有情身中所有大種。多是先業異熟所生。虛空體無異熟生義。由此虛空不立大種。大德説曰虛空雖大而體非種。不能生故。」（六六二b-c）
（舊缺）

これは、外道の五種の大種論に對する毘婆沙師達の反駁である。毘婆沙師達は、外道と異なつて虛空を大種として立てないことを主張するのであるが、いま兩論の間に二つの相違點を指摘することができる。まず第一は「何が故に虛空を大種と名づけざるか」と問うに對する答が、五事毘婆沙論に於ては、説主をあげていないのに對して、毘婆沙論は、尊者世友（△印）の釋として紹介している。内容は明らかに婆沙論の方が五事毘婆沙論より増廣されており、（付點の部分）これは、後述するように五事毘婆沙論の所説が大毘婆沙論において敷衍し増廣されて説かれるに至つたと理解されるべきであろう。第二には、外道の五種の大種論を破する段に於て、五事毘婆沙論が「大徳なる bhaddāria 妙音」一人（傍線の

部分）の説としていふところを、婆沙論は、「尊者妙音」と「大徳」（いずれも傍線の部分）との二人の學説に按分していふことである。これは一人の學説の諸要素が、のちに學説の發展とともに、それぞれ獨立してみなされるようになり、ついに二人の學説として紹介されるに至つたと理解されるのであつて、最初二人の學説であつたものが、のちに一人の説としてまとめられたと考えることには無理がある。とくに五事毘婆沙論の方であつて、妙音の學説を、「又 punar」（△印）の語をもつて接續して述べている點から考えても、明らかに同一人の學説をさしたものであつて、二人の學説をまとめたとする痕跡は見當らない。これらの二點からは、大毘婆沙論は五事毘婆沙論より後の作品であると考へた方が理解しやうい。

つきには、舊婆沙、轉婆沙をも參照しうる諸例を示そう。

B 五事毘婆沙論

「問此中所説根義云何。答增上最勝現見光明。喜觀妙等皆根義。」

大毘婆沙論（卷百四十二）

「問何故名根。根是何義。答增上義是根義。明義是根義。現義是根義。喜觀義是根義。端嚴義是根義。勝觀義是根義。主義是根義。問若增上義是根義者。諸有爲法展轉增上。諸無爲法於有爲

問若增上義是根義者。諸有爲法展轉增上。無爲亦是爲增上。則一切法皆應是根。」

爲法展轉增上。諸無爲法於有爲增上。則一切法皆應立根。何故

世尊立二十二。

脇尊者言。……………

………無者不立不應責問。

答依勝立根故無斯過。謂增上緣有勝有劣・當知勝者建立爲根。

有說。增上緣有下有上有劣有勝。上勝立根。下劣不立。

有說。……………故佛唯說此二十二根。

問何根於誰有幾增上。答……………

非餘根故(九九一・a)

問若增上義是根義者。答…唯耳根聞聲非餘根。」

新譯七三〇c—七三二a
舊譯二七二b—二七三a
轉 四四一c—四四二a

これは根の名義、二十二根とする理由、根の増上する處等について述べたところである。新婆沙と舊婆沙とはほとんど相應する。線で圍んだ部分は、婆沙論にあつて五事毘婆沙論には説かれていない部分である。また轉婆沙論は脇尊者の説を缺いている。つまり、「有爲性の中で、何故に二十二根のみを根と名づけるのか」という問いに對して、五事毘婆沙論はただちに、「勝なるに依つて根と立つ云云」と答えているのに對して、婆沙論は、新舊いずれも、脇尊者の説と二有説をもつて答えており、二有説の一つが五事毘婆沙論の答えと相應している。もし法救が、婆沙論を参照して五事論の毘婆沙論を造つたとしたならば、五事毘婆沙論になじみ深い脇尊

法救造五事毘婆沙論についての検討(河村)

者(彼れは論中に脇尊者の説を引用しているところがある)の説を除いて、ことさらに一有説のみをとつて答えとしている理由に苦しむ。轉婆沙論は脇尊者の説を缺いているから、婆沙論においてこの脇尊者の説と、他の一有説との傳誦が増補されるに至つたものであると考えればこの存缺の部分は理解される。従つて五事毘婆沙論が大毘婆沙論以後の作品であると考へることは困難である。

もう一つ例を示そう。

C 五事毘婆沙論

「不見色者名彼同分。彼同分眼。差別有四。一有過色彼同分眼。謂不能見諸色今滅。二有現在彼同分眼。謂不能見諸眼今滅。三有未來彼同分眼。謂不能見諸色當滅。四有未來定不生去」(九九一b)

大毘婆沙論(卷七十一)

「及彼同分者。此國諸師諸有四種。一者過去彼同分眼。謂眼界不見色已滅。二者現在彼同分眼。謂眼界不見色正滅。三者未來彼同分眼。爲眼界不見色當滅。四者未來畢竟不生眼界。」

新譯三六八a
舊譯二八〇a
轉 四四九b

これは眼界を説くうち、とくに彼同分について論じたところである。資料的には、前掲の場合と同じく、婆沙論としては新婆沙、舊婆沙、轉婆沙の三論を参照しようところである。△印のところは、新譯にあつては「此の國の諸師」としているが、舊譯の婆沙はこれを「外國の法師」としており、

一四三

轉婆沙論はこれを「鬪賓」としている。ところで五事毘婆沙論はこの部分についてはまったく示されていない。これは、次の事がらと関連して考察するべきである。新・舊兩婆沙と轉婆沙論とは、この連文に五種の彼同分を紹介し、その説主は、前掲の四種の場合とことなり、新婆沙にあつては「外國の法師」、舊婆沙にあつては「鬪賓」、轉婆沙論にあつては、「外者」としている。さらにまた新婆沙は「舊の外國師は此の國の説に同じく、舊の此の國の師は外國の説に同じ」(三九八・b)と附説している。これらの補足的説明を五事毘婆沙論はまったくもたず、ただ彼同分の四種を伝えるのみである。これらの事情から、五事毘婆沙論の所説は、婆沙論の毘婆沙師達にとつては、かなり積極的に参考資料の一つとされたものであろうとさえ考えられうるものである。』

以上、わずか三例を示すにとどまったが、このような検討を兩論にわたって加えていったのであつて、再度結論をいえば、現存婆沙論は、五事毘婆沙論を種本としてか、あるいは参考資料としてか、いずれにしても積極的に依用したと解した方が、以上論じ來つた如き諸事情を澁滞させることなく理解するのにきわめて便利であることを知らされるのである。すなわち、五事毘婆沙論は、木村博士の説にもとずけば、大毘婆沙論の先驅的小毘婆沙論の一として取り扱われるべきであらうと考へる。

新刊紹介(四)

鎌田茂雄「中國華嚴思想史の研究」

第一部 華嚴思想の形成と展開―その社會史的考察

第一章 華嚴宗成立の社會的背景

第二章 智儼の宗教的思想史的役割―佛教の中國の變容の一例

第三章 武周王朝における華嚴思想の形成

第四章 清涼澄觀の社會的立場

第五章 華嚴經結社の形成―華嚴思想の民衆化―

第二部 澄觀の宗教的思想史的考察

第一章 澄觀の華嚴と老莊思想

第二章 華嚴思想史におよぼした僧肇の影響

第三章 道生の頓悟思想と華嚴思想の變貌

第四章 華嚴思想と天台思想との交流

第五章 澄觀における禪思想の形成

第六章 澄觀の華嚴思想的特質

第七章 中國佛教思想史におよぼした澄觀の影響

A5 本文六一八頁 圖版七頁 索引一四頁

東京大學東洋文化研究所刊 定價四、〇〇〇圓